



6月にくも膜下出血で倒れたプロ野球日本ハムの小村勝社長(58)が9月の職場復帰後、精力的に仕事をこなしている。「後遺症で、標準語忘れてもうたわ」。これは、大阪育ちの小村社長のギャグ。後遺症はない。病前からコテコテの大阪弁なのだから。

周囲が「ミラクル」と喜んだ小村社長の復帰。それを支えた病院の体制や医師の思いを記しておきたい。

小村社長が搬送された札幌植心会病院は、くも膜下出血の手術を年間50〜80件行い、このうち小村社長と同じ最重症の患者が20〜30%を占めるという。

執刀した野田公寿茂医師(47)の腕が光った。小村社長は椎骨動脈解離性動脈瘤が破裂し、くも膜下血腫で締め付けられた延髄の圧迫を取り除く「除圧」が遅れれば、社会復帰はおろか救命も危うかった。

脳の深い部分に酸素や栄養を届ける直径わずか0・8ミリの血管(穿通枝)をバイパス手術により温存。延髄梗塞を防ぎ、死亡率50%という死の淵から後遺症なしの社会復帰を実現させた。

日ハム小村社長 復帰支えた医師の思い

一般的には患者到着から緊急手術開始までに1〜2時間ほどかかるとされる。札幌植心会はスタッフ、装備など5〜10分で緊急開頭手術を始める体制を整えており、これが小村社長の場合も奏功したという。

数人の医師、看護師ら十数人が携わった約14時間の大手術。成功は「チーム医療の結果です」と谷川緑野院長代行・脳卒中センター長(62)は話す。

高度な技術を持った「スーパードクター」たちの仕事の成果でもあるが、谷川センター長は医師だけが注目されるのは好まない。

谷川センター長によれば、医師は1人で何でもできると自信過剰になる傾向が強いという。「私も若いときはそうだった」と自戒する。「勘違いしちゃいけない。医者1人ではなにもできない。小村社長の手術に携わった全員が役割を果たしてくれた」と感謝する。

「ミラクル」には続きもあった。10月のドラフト会議の1位指名で、日本ハムが抽選で交渉権を引き当てた柴田獅子の所属は福岡大大濠高。執刀医の野田医師の出身校と同じだったのだ。「ミラクル」な縁を感じさせた。

(須貝剛)